瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告

――松阪市櫛田町所在――

２０００・３

三重県埋蔵文化財センター

序

松阪市は、三重県の中南部に所在し、櫛田川下流域にあたるところです。櫛田川は三重・奈良両県境の高見山に源を発し、松阪市松名瀬町で伊勢湾へと流れる、延長約84kmの南勢第二の河川です。櫛田川下流域は、かつて幾度となく流れを変え、洪水に見舞われた地域でもありました。

今回調査が実施されました松阪市櫛田町に所在する瀬干遺跡は、この櫛田川左岸に位置し、平成８年度に行われた前回の調査に引き続き弥生時代から古墳時代にかけての方形周溝墓が見つかりました。

調査した場所は、残念ながら道路の整備事業のため消滅してしまいます。地域振興のための道路整備も大変重要な事業ですが、その下に眠っているわれわれ祖先の生活の証をなくしては未来を語ることもできません。消滅してしまう遺跡を記録保存という形で少しでも皆様方に知っていただき、文化財保護の大切さを知っていただければと願ってやみません。

文末となりましたが、協議から発掘調査にかけて多大なるご理解とご協力をいただきました県土整備部・松阪地方県民局建設部・松阪市教育委員会・松阪市在住の方々に深く感謝を申し上げます。

平成12年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　大井　興生

例　　言

1．本書は三重県教育委員会が、三重県県土整備部から執行委任をうけて実施した平成10年度一般地方道松阪環状線地方特定道路整備事業に伴う瀬干遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は以下の体制により実施した。

調査主体；三重県教育委員会

調査担当；三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）

技師　原田恵理子・萩原義彦　　主事　中川　明

3．調査にあたっては、櫛田地区土地改良区および地元の方々、松阪市教育委員会、及び県土整備部・松阪地方県民局建設部から多大な協力を受けたことを明記する。

4．報告書作成にあたっては、赤塚次郎（愛知県埋蔵文化財センター）・田村陽一（相可高等学校）・永井宏幸（愛知県埋蔵文化財センター）・野口哲也（愛知県教育委員会）・原田　幹（愛知県教育委員会）・早野浩二（愛知県埋蔵文化財センター）・山岸良二（東邦大学付属東邦中高等学校）・山中　章（三重大学）・和氣清章（嬉野町教育委員会）の各氏に有益なご教示をいただいた。

5．本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。報文執筆は調査担当者が行い、目次に分担を記した。

6．本書に用いた地図および遺構実測図は、国土座標第VI系に準拠し、方位の表示は座標北で示している。なお、磁北は西偏6°30′（平成2年国土地理院）、真北方位は東偏0°18′である。

7．写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

8．当報告書での遺構の表記は、以下の略記号を用いる。

SD…溝　　SX…方形周溝墓　　SK…土　坑　　pit…ピット、柱穴

9．当発掘調査による図面・写真等の記録類並びに出土品は、三重県埋蔵文化財センターに於いて保管している。

10．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本 文 目 次

Ⅰ. 前　　言 ……（原田恵理子）…… 1
Ⅱ. 位置と環境 ……（中川　明　）…… 3
Ⅲ. 遺　　構 ……（原田恵理子）…… 6
Ⅳ. 遺　　物 ……（　〃　）…… 18
Ⅴ. 科学分析 ……（パリノ・サーヴェイ株式会社）…… 22
Ⅵ. 結　　語 ……（原田恵理子）…… 23

挿 図 ・ 表 目 次

第1図　遺跡位置図…… 4
第2図　遺跡地形図…… 5
第3図　調査区位置図…… 5
第4図　遺構平面図…… 7・8
第5図　遺構平面図
（弥生時代終末から古墳時代初頭）… 9・10
第6図　調査区土層断面図…… 11
第7図　SX4平面図及び土層断面図…… 12
第8図　SX6・7平面図及び土層断面図
・SX7遺物出土状態図…… 13
第9図　SX8・9平面図…… 14
第10図　SX8・9遺物出土状態図
及び土層断面図・見通し図…… 15
第11図　SX10平面図及び土層断面図
・遺物出土状態図・見通し図…… 16
第12図　調査区北側ピット群平面図…… 17
第13図　出土遺物実測図（その1）…… 19
第14図　出土遺物実測図（その2）…… 20
第15図　出土遺物実測図（その3）…… 21
第16図　赤色物質付着壺片の元素定性
スペクトル…… 22
第17図　瀬干遺跡周辺微地形図…… 24
第1表　遺構一覧表…… 20
第2表　遺物一覧表…… 21

図 版 目 次

PL1　調査前風景　表土掘削
作業風景　現地説明会風景
完掘状況（北から）
PL2　SX4（北東から）
SX6（東から）
PL3　SX7（南西から）
SX7　遺物出土状況（東から）
PL4　SX8（南東から）
SX8　遺物出土状況（北から）
PL5　SX9（西から）
SX9　北西コーナー部分集石検出状況
（南西から）
SX9　北周溝遺物出土状況（北西から）
PL6　SX10（南西から）
SX10　北周溝遺物出土状況（南から）
PL7　出土遺物（1）
PL8　出土遺物（2）

Ⅰ．前　　言

1　調査の契機

近年、松阪市周辺は市街地を中心として道路の整備・充実がすすむ一方で、交通量がますます増加し、道路事情が改善されたとは言い難いのが実状である。そこで、交通量を分散させて渋滞の緩和をはかるために、一般地方道松阪環状線地方特定道路の整備が計画された。

瀬干遺跡は、平成７年度、農業基盤整備に伴い一部発掘調査が行われ、方形周溝墓が検出されている。今回の事業は１次調査の東隣に位置し、方形周溝墓が検出されることが予想された。埋蔵文化財センターでは、平成９年８月に試掘調査を行い、今回の事業地の内、1,500㎡本調査をするに至ったが、調査の過程で北側に遺構が確認されたため、さらに北側へ調査区を拡張した。従って最終的な調査面積は1,900㎡になった。

2　調査の経過

(1)　調査経過概要

調査は1998年８月17日～12月７日まで行い、実働64日であった。今回の調査をひと言でいうと、水との戦いである。今年は天候不順で雨が多く、調査中に４回もの台風に見舞われた。ベース面が粘質土であるためか、ひとたび雨に降られると、ポンプで水をかい出すのにほぼ１日かかる。特に台風７号接近の際には、強風のためハウス・トイレ等が転倒するアクシデントがおこり、復旧するのに１週間近くを要した。また、調査区北側はかなり落ち込み、人力掘削の際の土量は膨大なものであった。

足場が悪いなかでの困難な作業であったにもかかわらず、ご協力してくださった作業員の皆様方に感謝の意をこめてここにご芳名いたします。

飯田純子、稲熊三雄、岩塚慶次、岩塚和子、
梅山喜郎、大喜多すゑ、太田千枝、大西うめ、
北山　清、木村すず、坂倉一男、清水たつよ、
清水みさえ、杉田順一、鈴木則男、関岡益美、
高山玲子、田中四郎、出口康宏、刀根暢子、
中川悦子、中西紀美子、野中　孝、野村富榮、
橋本　健、長谷川市子、松本とき、道畑昭四男、
箕島一二三、山出久和、渡辺義和　（敬称略）

調査日誌抄

1998年

８月17～19日　28ライン以南、表土剝ぎ。

８月20日　ハウス・道具小屋・トイレ設置。

８月21日　道具搬入・地区杭設定。

８月24日　作業員開始。28ライン以南、壁清掃・ＳＤ１検出。

８月25日　用水路（かく乱）掘削。

８月27日　24ライン以北、南側より13ラインまで表土剝ぎ。ＳＤ２掘削。

９月１日　28ライン以南掘削終了。

９月２日　24ライン以北調査に入る。ベルト・コンベヤー設置。壁清掃・ＳＤ３検出。

９月３日　ＳＤ３掘削。

９月４日　さらに遺構検出。遺構密度は粗である。

９月９日　南側落ち込み部分掘削開始。

９月11日　ＳＤ５検出。

９月15日　台風５号東海地方接近のため、テントをたたむ。

９月16日　台風５号接近に伴う雨のため、調査区一面水没。終日水抜き。

９月17日　D13中世包含層掘削。ＳＤ５掘削。22ラインにも、溝確認。

９月21日　台風７・８号接近のため、テントをたたむ。

９月22日　台風７号による強風のため、ハウス・道具小屋は用水に転倒。トイレも転倒。

９月23日　ハウス内の道具・用水に流出した道具等を回収（森川常厚・船越重伸・中川・萩原・原田）。

９月24日　転倒したハウスをおこす。ハウス・トイレは交換。23日に引き続き、用水に流出した道具等を回収。

９月25日　ハウス搬入。流失した分の道具等を新たに搬入。調査区水抜き。

９月28日　午後から作業員を入れての作業再開。道具類の洗浄。

９月29日　ＳＸ４・ＳＤ５掘削終了。

10月２・５日　13ラインより北表土剝ぎ。

10月６日　13ラインより北へ検出開始。

10月８日　ＳＸ４の続きを検出。調査区東側は中世に削

平を受けるか。

10月9日　ＳＸ４掘削。ＳＸ６検出・掘削開始。９・10ライン検出。１次調査部分を確認。

10月12日　ＳＸ６掘削。三重労働基準局安全専門官浜野秀樹氏視察。

10月13日　ＳＸ７・８検出。

10月14日　ＳＸ４完掘。ＳＸ７掘削。

10月15日　ＳＤ12検出・完掘。台風10号接近のため、台風対策。

10月19日　ＳＸ６完掘。ＳＸ８掘削。

10月21日　２ライン以北、埋土が不明確なため、トレンチを入れる。

10月22日　ＳＸ７遺物出土状態図終了。小型壺内面に赤色顔料の付着を確認。ＳＸ８東周溝・ＳＸ９西周溝重複部分から、椀型高杯・ヒサゴ壺出土。ＳＸ９北西コーナー部分から集石検出。作業員さん達、俄然張り切る。東側トレンチでおちこみ埋土下から遺構検出。拾水小学校６年生50名、遺跡見学。

10月26日　ＳＸ９集石下精査するが、掘形等確認できず。ＳＸ９北周溝底付近からパレス壺出土。

10月28日　ＳＸ８南周溝遺物出土状態図終了。遺物取り上げ時に広口壺肩部にヘラ描き確認。北側落ち込み埋土除去開始。

10月29日　ＳＸ８完掘。ＳＸ９遺物出土状況写真撮影。

10月30日　ＳＸ８・９遺物出土状態図終了、遺物取り上げ。ＳＸ７・８・９土層断面図終了。

11月４日　ＳＸ８南周溝・８北周溝土層断面図終了。１ラインまで落ち込み掘削終了。多数のピット検出。

11月９日　落ち込み掘削終了。相変わらずピット等が検出される。ＳＸ10掘削。

11月10日　ＳＸ10から広口壺が横転した状態で出土。

11月11日　落ち込み下ピット掘削。壁清掃。

11月12日　清掃。資料提供。

11月13日　写真撮影。現地説明会準備。

11月15日　現地説明会（70名参加）。

11月16日　28ライン以南壁清掃。ベルト・コンベヤー撤収。

11月17日　遺構実測（松葉和也・柴山圭子・中川）。落ち込み下に遺構が確認されたため、さらに北側へ調査区拡張。表土剝ぎ。

11月18日　遺構実測（野原宏司・中川）。表土剝ぎ。三重大学山中章教授、学生10名程連れてご来訪。

11月19日　拡張部分検出。ＳＤ11とピット数基のみ検出。北辺は砂と粘土の互層が確認され、流路と判断。

11月20日　流路部分、トレンチ掘削。

11月24日　清掃、写真撮影。遺構実測（野原・中川）。松阪ケーブルＴＶ取材。

11月25日　遺構実測（野原・柴山・中川・原田）。

11月26日　遺構実測（森川・柴山・中川・原田）。

11月27日　遺構実測（浜辺一機・中川・原田）。

11月30日　発掘用具撤出。

12月１・２日　測量（中川・原田）。

12月３日　落ち込み部分重機掘削。

12月４日　落ち込み部分測量（中川・原田）。

12月７日　ハウス・道具小屋・トイレ撤収。引き渡し。

(2)　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

●法第57条の３第１項（文化庁長官あて）

平成10年５月25日付け道整第90号（県知事通知）

●法第98条の２第１項（文化庁長官あて）

平成10年８月26日付け教生第856号（県教育長通知）

●遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（松阪警察署長あて）

平成11年１月19日付け教生第８－38号（県教育長通知）

３　調査の方法

調査区内に任意で４ｍ×４ｍのグリッドを設定した。これは、国土座標第Ⅵ系とは合致していない。また、グリッドは当初の調査区を基準に、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…、北から南へ１・２・３…としたが、最終段階でさらに調査区が北側へ拡張したため、１から北へは０・ア・イ…と付加した。

Ⅱ．位置と環境

1　位置と地形

松阪市櫛田町に所在する瀬干遺跡（1）は、現況は主に畑地、または水田となっている。今回の調査地の標高は約10m で、南から北へと緩やかに傾斜する。一帯は田園風景の広がる市東部の穀倉地帯で、櫛田川下流域の沖積平野に位置している。

当地一帯は、古代条里制が施行された場所で、ほ場整備の実施されていない北側の水田で区画が復元できる。また当地は斎宮寮田となっていた場所でもある。以下、近年発掘調査が進められている櫛田・漕代地区、および周辺地域の遺跡を中心に歴史的環境を記述する。

2　歴史的環境

（1）　縄文時代

櫛田町では瀬干遺跡から中期末の土器が若干出土したほか、良好な遺構・遺物は確認されていない。当該期の遺跡は、主に櫛田川の上・中流域に分布し、その多くは多気郡多気町・松阪市中万町辺りまで確認されている。近年、上寺遺跡[1]（2）、鴻ノ木遺跡[2]（3）、朱中遺跡[3]（4）の調査が行われているが、そのうち鴻ノ木遺跡では早期前半の竪穴住居や後期の埋道付炉穴を検出した。また、多気郡明和町のコドノＢ遺跡[4]（5）では、早期前半の集石炉が確認され、櫛田川下流域での新たな調査事例に加えられた。

（2）　弥生時代

弥生時代に入ると、祓川右岸の明野原台地や櫛田川との間に形成された自然堤防上に遺跡が分布する。明和町の金剛坂遺跡[5]（6）では、前期の竪穴住居２棟が検出され、甕や壷が出土している。コドノＢ遺跡では前期の方形周溝墓２基が検出されている。

また弥生時代から古墳時代にかけて、櫛田川、祓川下流域での方形周溝墓の調査例が増加しつつある。コドノＢ遺跡では、方形周溝墓が９基確認されている。旧コドノ古墳（7）は、直径10m の円墳であるとされてきたが、平成10年度調査で改めて墳丘が残存する方形周溝墓と確認された。瀬干遺跡でも２度の調査によって同時期の良好な方形周溝墓が計８基確認されている[6]。

（3）　古墳時代

前期になると、櫛田川両岸の自然堤防上に古墳が築造される。松阪市横地町の横地高畑遺跡[7]（8）では、一辺９m の方墳が見つかり、周溝埋土から鉄鏃や土師器高杯が出土した。さらに北側下流域にあたる漕代地区所在の中の坊遺跡[8]（9）からは、一辺8.5m の竪穴住居が確認され、大量の土師器が出土している。

（4）　奈良時代～平安時代

横地西ノ垣内遺跡[9]（10）では、製塩土坑が確認されている。中の坊遺跡でも製塩土器の出土が報告されており、製塩土器の輸送経路を辿る良好な資料といえる。奈良時代の寺院跡としては大雷寺廃寺（11）の存在が推定されているが、今のところ正確な所在地については明らかでない。大川上遺跡[10]（12）では、溝から墨書土器が一括出土している。中でも特筆できることは、「神宮寺」と墨書された土師器皿の出土であり、付近に、神宮寺に関連した場の存在を想定させる資料である。

（5）　中世以降

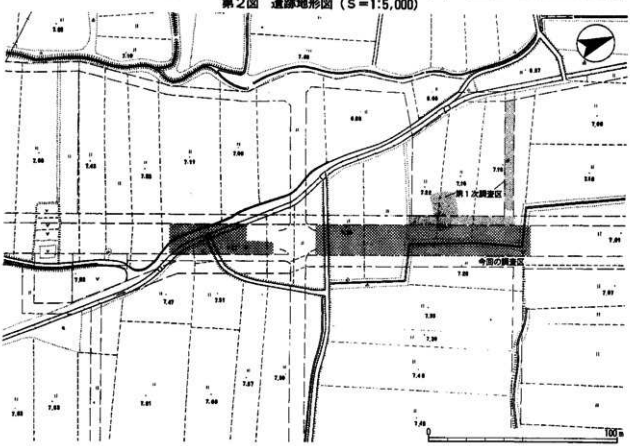
当遺跡から東へ約200m の所に位置する櫛田地区内遺跡群かん志ゆう地区[11]（13）では、平成８年度調査で、南東隅土坑を伴う掘立柱建物が検出された。かん志ゆう地区から集落を隔てた北東側に同遺跡群池ノ端地区[12]（14）が所在する。室町時代の土壙墓や鐘を検出し、茶釜や鍋が多数出土している。また、江戸時代と推定される掘立柱建物・溝等も検出している。漕代地区の古川遺跡[13]（15）、横地高畑遺跡、横地西ノ垣内遺跡、櫛田上地区の山添遺跡[14]（16）では、掘立柱建物やそれに伴う石組井戸が検出され、中世村落のありかたを知る上で注目される。

参考文献・註

櫛田町「三重県の地名」『日本歴史地名大系24』平凡社　1983、5
「櫛田地区」『松阪市史』第２巻資料編考古　勉誠書房　1978、10
(1) 下村登良男ほか『上寺遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1981、3
(2) 小浜　学ほか『鴻ノ木遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1998、9
(3) 田村陽一ほか『朱中遺跡・朱中古墳群』三重県埋蔵文化財センター　1996、3
(4) 西出　孝ほか『コドノ八遺跡・コドノＢ遺跡（第１次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999、3
(5) 萩原義彦ほか『金剛坂遺跡（第４次）・長ノ口古墳群（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999、3
(6) 宇河雅之ほか『瀬干遺跡・鍛冶内遺跡・大雷寺遺跡・櫛辻遺跡・北ノ垣内遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1996、3
(7) 中川　明ほか『横地高畑遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996、3
(8) 伊藤裕之ほか『中の坊遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1997、3
(9) 大川　操『横地西ノ垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999、3
(10) 橋山圭子『大川上遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999、3
(11) 木野本和之ほか『櫛田地区内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター　1997、3
(12) 上掲に同じ
(13) 伊藤裕之ほか『古川遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1996、3
(14) 新田　洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1978、3
　　坂倉一光『山添遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1998、3

第１図　遺跡位置図（Ｓ＝1:50,000）（国土地理院「松阪」「松阪港」1:25,000による）

第２図　遺跡地形図（Ｓ＝1:5,000）



第３図　調査区位置図（Ｓ＝1:2,000）

Ⅲ．遺　構

1　基本的な層序・地形

基本層序は、表土下に中世の包含層である灰色粘質土、古墳時代～古代の堆積土である褐灰色シルト、ベースとなる淡黄色砂質土あるいは暗黄灰色粘質土になる。ベース面は調査区中央部が高く、そこから北及び南へいくほど、低く落ちこんでいく。さらに、調査区北端では粗砂が厚く堆積することから、流路であったと考えられる。１次調査の成果と現地形から把握するに、１次調査区の東側も地形が落ち込む可能性が考えられる。そのため、東から今回の調査区あたりへ向かって微高地が伸びると推定され、この微高地上に弥生時代末から古墳時代初頭にかけて墓域が築かれたと考えられる。

以下、時期ごとに遺構の概要を記述する。

2　弥生時代末から古墳時代初頭

溝１条及び方形周溝墓６基を検出した。

溝に関しては出土遺物が少なく、縄文時代中期末の深鉢片が１点（17）・弥生時代中期の甕片が２点（21・22）程で、当該期の遺物がみられない。しかし、ベース面である暗黄灰色粘質土からの掘りこみが確認されること、微高地で検出した遺構でベース面からの掘りこみの確認される遺構は弥生時代末から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓群であることから、方形周溝墓と同じ時期である可能性を考えておきたい。

方形周溝墓のうち２基は、１次調査で検出したものの続きである。方形周溝墓の特徴としては、内側のラインは直線的で外側ラインは曲線である。断面形はほぼＵ字であり、内側が急傾斜で外側が緩傾斜となる。形態の全容のわかる周溝墓は１次調査を含め３基であるが、この３基はいずれも南周溝に陸橋部をもつという点で共通している。隣り合う周溝墓の多くは、周溝の一部が重複している。

溝ＳＤ11　北側落ち込み部分で検出した。標高約６ｍのところで地形に沿った形で検出した。断面形はＵ字状を呈す。

方形周溝墓ＳＸ４　調査区微高地部分の南寄りに位置する。南周溝及び東周溝の大半は中世以降に削平されている。規模は東西11.2ｍで、今回の調査で最も大きい。

方形周溝墓ＳＸ６（１次調査ＳＸ４）　１次調査でＳＸ４と報告されている周溝墓の南側延長部分を検出した。ＳＸ４の北側に位置する。南周溝の西側に陸橋をもつ。南東部は近代の側溝で削平される。規模は東西7.3ｍ、南北6.8ｍである。

方形周溝墓ＳＸ７　ＳＸ６の南東に隣接する。周溝の上層は中世以降に削平され、なおかつ周溝のほとんどが調査区外であり、北周溝及び西周溝の一部のみ検出した。西周溝から内面に水銀朱が付着した壺（３）が出土した。

方形周溝墓ＳＸ８（１次調査ＳＸ３）　ＳＸ６の北東隅に隣接し、ＳＸ６東周溝の一部と重複する。南周溝の中央に陸橋をもつ。陸橋部の西側で周溝がわずかに南へ延びるようにみえるが、近代の側溝で削平されているため、不明である。

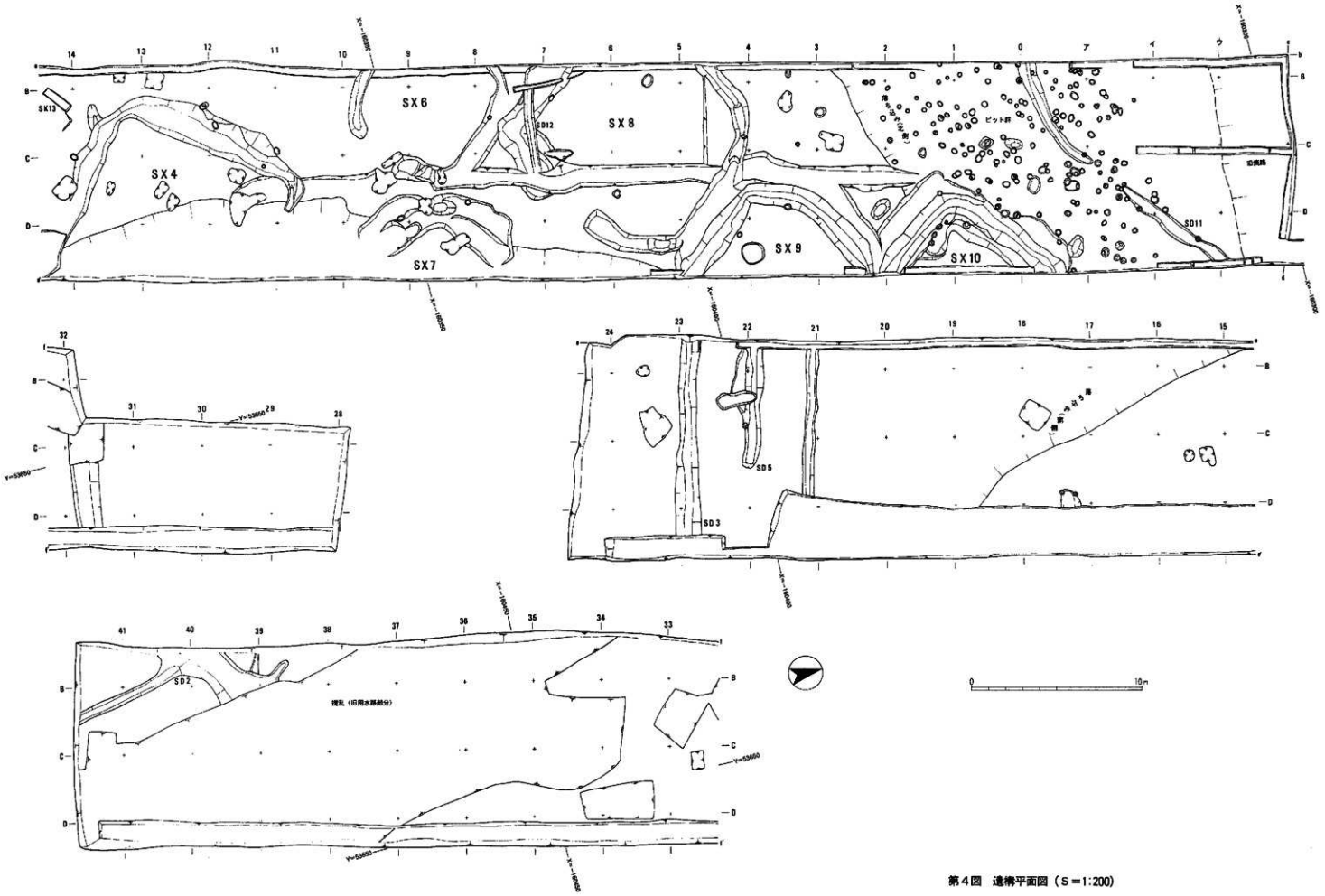
方形周溝墓ＳＸ９　ＳＸ８の東隅に隣接し、ＳＸ８東周溝と一部重複し、方向をほぼ揃える。周溝の残りは比較的良好で、深い所で検出面から約60cmである。断面形は逆台形であり、周溝の内側が深く、外側は検出面から10～15cm程度下がった平坦面になる。西周溝の一部及び東・南周溝は調査区外へ伸びる。北東隅から周溝底部より高い位置ではあるが、拳大の礫が20個ほどまとまった状態で検出し、付近では焼土も確認している。また、西周溝から、ほぼ完形のパレス壺（10）が出土した。

方形周溝墓ＳＸ10　微高地の北端で検出した。ＳＸ９の北東部分で隣接する。西周溝の一部及び東・南周溝は調査区外へ伸びる。土器は比較的多く確認されたが、いずれも周溝上層からの出土である。

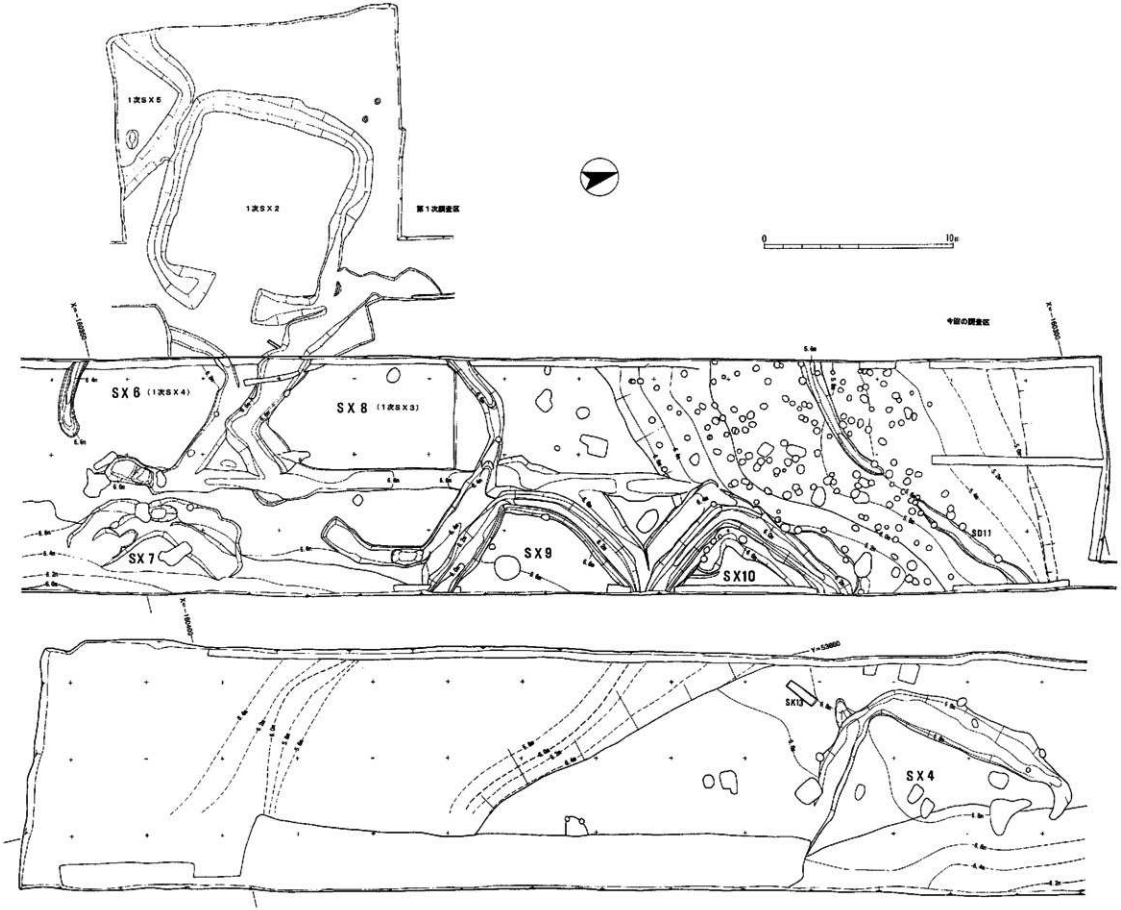
土坑ＳＫ13　ＳＸ４の南西側に位置する。長軸約1.8ｍ、短軸50cmの方形の土坑である。埋土は方形周溝墓埋土と同じ褐灰色粘質土であり、この土坑の側面は底部から見て、垂直に近いかたちで立ち上がる。これらのことから、方形周溝墓とほぼ同時期の墓域である可能性も考えられる。

3　平安時代末期、鎌倉時代以降

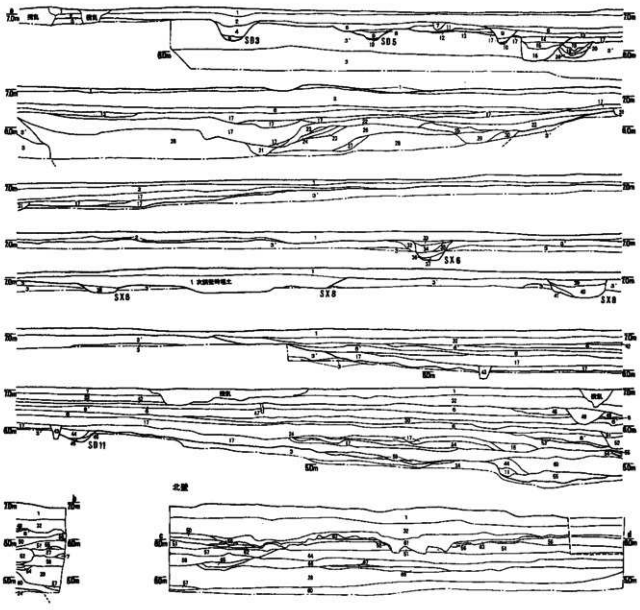
溝ＳＤ２　B38～41で確認した。東西方向にはしる溝（ＳＤ２ａ）と南北方向にはしる溝（ＳＤ２ｂ）に分けられる。ＳＤ２ａの東側部分は、ほ場整備前まで走っ



第４図　遺構平面図（S＝1:200）

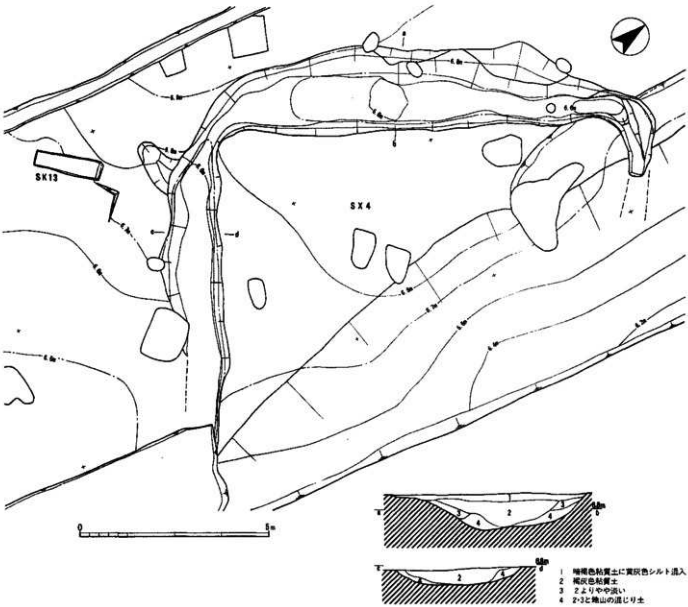


第５図　遺構平面図（弥生時代終末から古墳時代初頭）（Ｓ＝1:200）



1 盛土（現状色粘質土に腐植物多量入る）
2 灰色粘質土（1.0YR マンガン多量、中位含多量）
3 暗黄灰色、粘質土（5G.6）
3' 暗黄灰色、砂質土（5G.6）
4 灰色粘質土に黄褐色粘土ブロック混入（5G5GR.6）
5 灰色粘質土に灰色砂及び黄褐色粘土ブロック混入（5GY5GR.6）
6 暗灰色シルト（1.0BY マンガン多量）
6' 暗黄灰色シルト（1.0BY マンガン多量）
7 暗灰色シルト
8 灰色粘質土（5GY5G.6）
9 暗黄灰色粘質土（5GY5G.6）
10 黄灰色砂質（5GY5G.6）
11 黄灰色砂質
12 灰色粘土
13 灰色粘土に砂粒混入
14 赤褐色粘質土
15 暗褐色粘質土に灰色砂粒混入
16 褐色粘質土
17 暗灰色シルト（1.0BG マンガン多量）
18 暗褐灰色粘質土
19 淡赤灰色粘土
20 19より淡い
21 黄灰色粘土
22 黄灰色シルト
23 暗褐色粘土
24 黄灰色砂質
25 灰褐色粘質土
26 黄灰色砂質に黄灰色粘土ブロック混入
27 黄灰色粘質土
28 黄灰色～暗褐色粘土と灰色粘砂の互層
29 暗褐色粘質土に炭混入
30 暗灰色粘質土
31 暗灰色粘質土に黄灰色粘土ブロック混入
32 黄灰色粘質土
33 暗灰色粘質土に黄褐色粘土ブロック混入（5YR5GR.6褐色粘土）
34 暗灰色粘質土に褐山ブロック混入（5YR5GR.6褐色粘土）
35 子に黄灰色砂粒少量に混入（5GY5GR.6褐色粘土）
36 暗褐色粘質土（5YR5GR.6褐色粘土）
37 36に黄灰色砂混入（5YR5GR.6褐色粘土）
38 暗灰色シルトに褐山ブロック混入（5YR5GR.6褐色粘土）
39 淡褐灰色粘質土（5YR5GR.6褐色粘土）
40 淡褐灰色砂粒混入
41 褐灰色砂質土
42 黄灰色粘質土（1.0BY マンガン多量）
43 褐灰色粘質土（5YR5G.6）
44 暗褐色粘質土
45 灰褐色粘質土に褐山ブロック混入
46 暗色粘質土に褐山ブロック混入
47 褐灰色粘質土
48 褐灰色粘質土（1.0BY マンガン多量）
49 暗黄灰色シルト
50 淡灰褐色シルト（1.0BY マンガン多量）
51 暗褐色シルト
52 褐灰色砂質シルトに褐灰色～灰色粘土ブロック混入
53 淡褐色粘質土
54 淡灰色粘質土
55 灰色粘砂
56 淡褐灰色シルトに砂分多量に混入
57 褐灰色粘質土に黄灰色粘土ブロック混入
58 褐色～灰色粘土
59 明褐色粘質土
60 黄灰色～黄灰色砂粒と黄灰粘土の互層
61 灰色砂に灰色シルト混入
62 暗灰色シルトに灰色砂粒混入
63 黒灰色シルト
64 暗褐色～黄灰色シルト
65 暗灰色粘質土に暗灰色粒砂混入
66 灰色シルト
67 黄灰色中粒砂
68 黄灰色砂粒

第６図　調査区土層断面図（Ｓ＝1:50）



第7図　ＳＸ４平面図（Ｓ＝1:100）及び土層断面図（Ｓ＝1:40）

ていた櫛田川左岸第二幹線水路に切られる。幅約２ｍ・深さ約20cmで断面形はＵ字形である。ＳＤ２ｂは、ＳＤ２ａよりも細くかつ浅く、ＳＤ２ｂからＳＤ２ａへ流れる仕組みであると思われる。埋土はいずれも灰色粘質土である。出土遺物は、須恵器片および山茶椀片であるが、いずれも細片のため時期の断定は難しく、埋土の色・質も加味すると中世以降になると思われる。

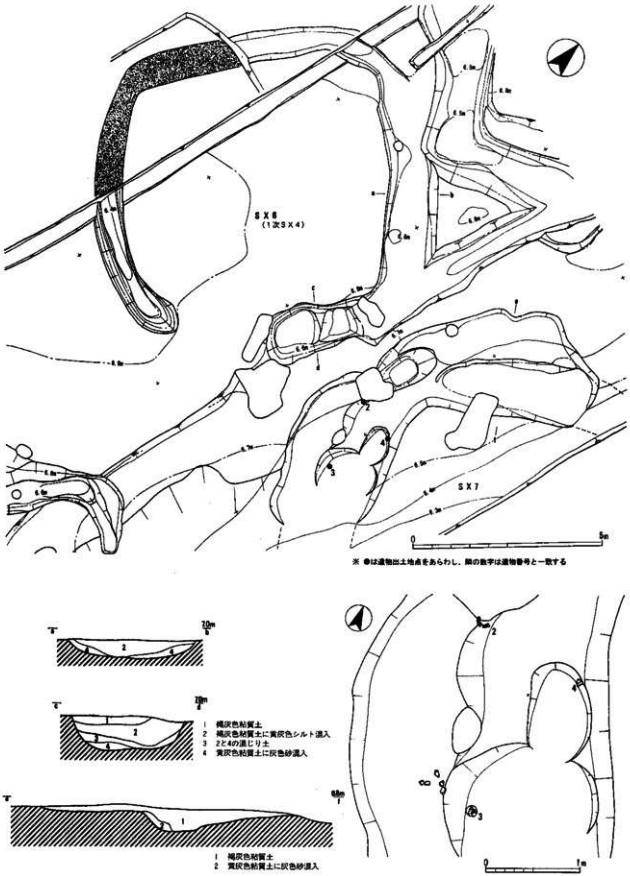
溝ＳＤ３　23ラインで検出した。断面形は東側がＵ字形で、西側がＶ字形となる。埋土は灰色粘質土である。遺物はほとんどが細片であり、灰釉陶器片・緑釉陶器片・山茶椀片などが出土した。

溝ＳＤ５　22ラインで検出した。断面形は逆台形となる。埋土は灰褐色粘質土である。ＳＤ３同様、遺物は細片であった。

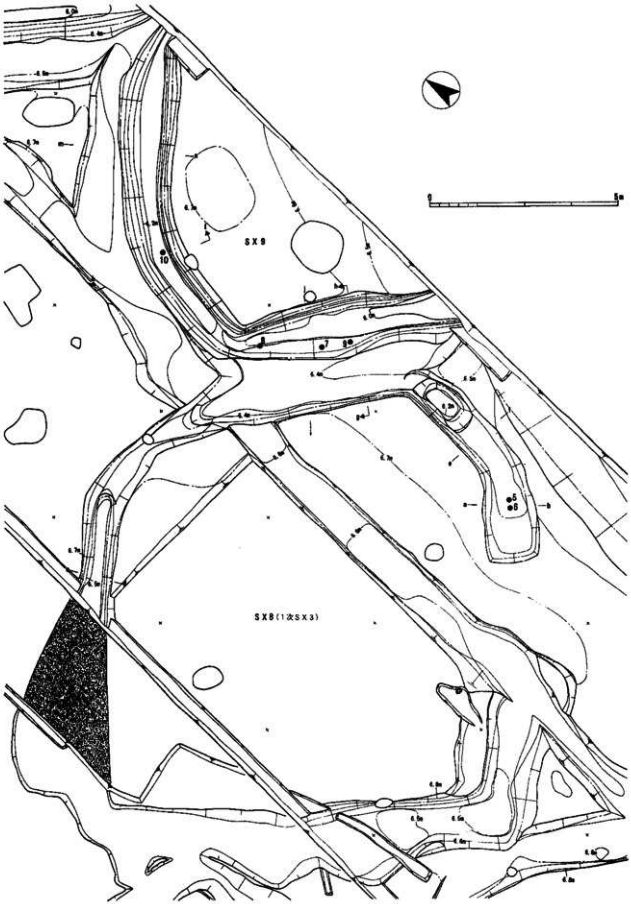
溝ＳＤ12　ＳＸ８の西及び南周溝を切っている。埋土は灰色土でＵ字形の深さ20cm程度の浅い溝である。山茶椀片・土師器片が少量出土した。

４　時期不明

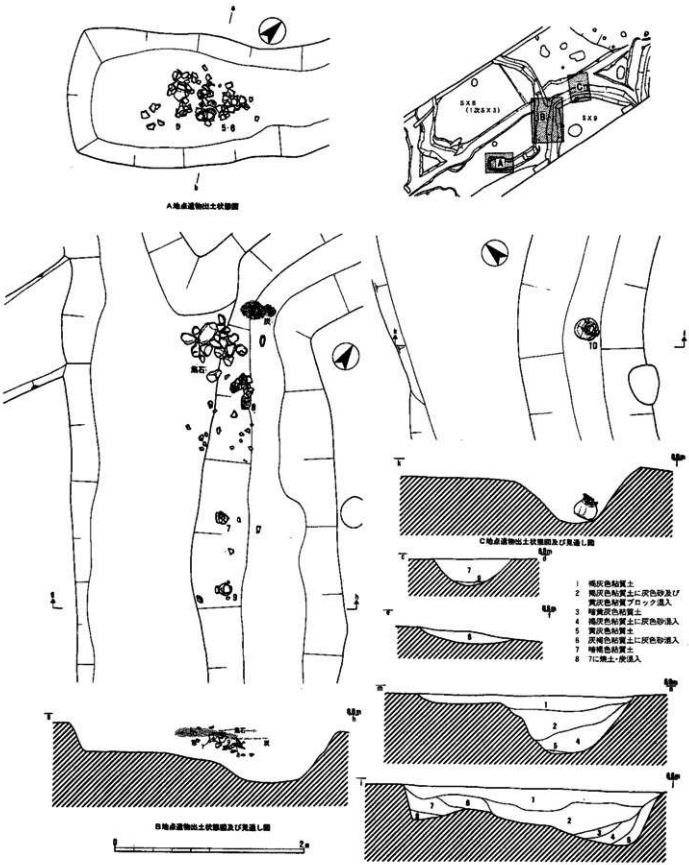
ピット群　調査区北側の落ち込み部分で検出した。時期比定の可能な出土遺物がなかったため、詳細な遺構の時期は不明であるが、一部のピットについては調査区西壁の断面観察で落ち込みの堆積土からピットを掘り込むのが確認されたため、少なくとも方形周溝墓が造られた以後の時期である古墳時代あるいは奈良時代の可能性が高い。一部２間×２間の堀立柱建物になる可能性のあるものも存在するが、微高地端部の傾斜面のみに果たして建物を建てたのか、疑問である。このピット群の北側に流路が確認されていることもあり、流路に伴う護岸施設的なものも考える必要があろう。



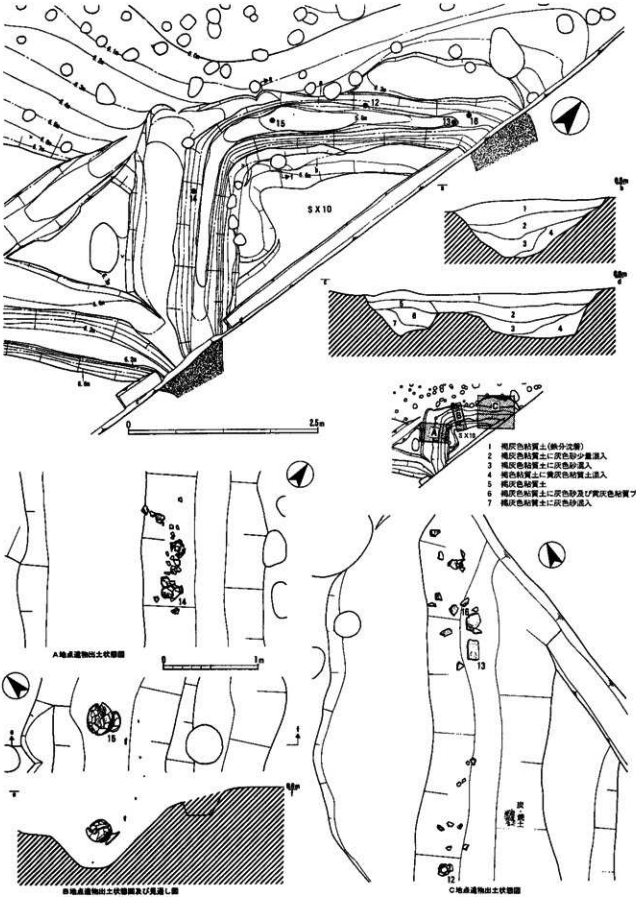
第8図　SX6・7平面図（S＝1:100）及び土層断面図・SX7遺物出土状態図（S＝1:40）



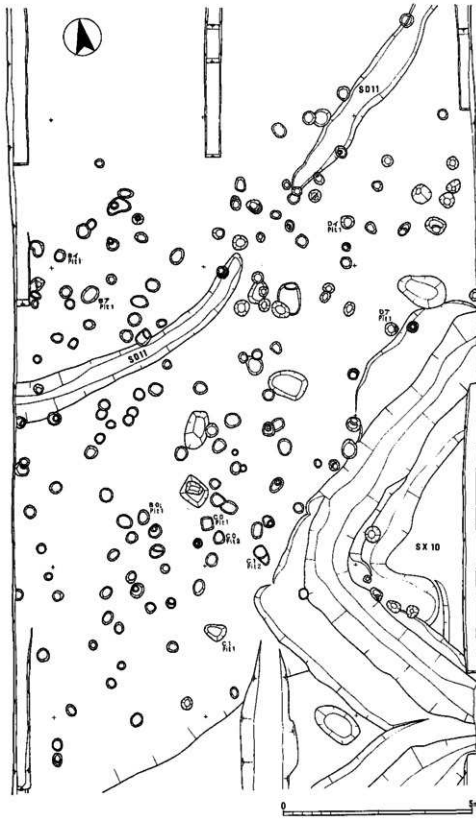
第9図　SX8・9平面図（S＝1:100）



第10図　ＳＸ８・９遺物出土状態図及び土層断面図・見通し図（Ｓ＝1:40）



第11図　ＳＸ10平面図（Ｓ＝1:100）及び土層断面図・遺物出土状態図・見通し図（Ｓ＝1:40）



第12図　調査区北側ピット群平面図（S＝1:100）

Ⅳ．遺　　物

1　弥生時代～古墳時代初頭

いずれも、方形周溝墓の周溝部分からの出土である。

ＳＸ６（１）　１は脚部が外反し、端部を丸く収める。この形状から、椀形高杯の脚部と考えられる。

ＳＸ７（２～４）　２は広口壺である。外面は粗いハケで調整し、口縁端部はクシ状工具による刺突を施す。頸部は突帯の剝落した跡が認められる。３は壺である。ヒサゴ壺の体部になるものと考えられるが、外面は比較的粗いミガキで、全体的に粗いつくりである。内面底部に朱が付着している。４は砥石である。１面のみ擦痕が確認される。

ＳＸ８（５・６）　５・６は広口壺である。いずれも頸部から一旦上方へのび、口縁部で外方に広がる。体部中央やや下半に最大径をもつ。頸部に突帯をもち、突帯及び口縁部に刺突を施す。外面はハケ、内面はナデ調整を行う。５は肩部にヘラ状工具で記号状のものが描かれている。

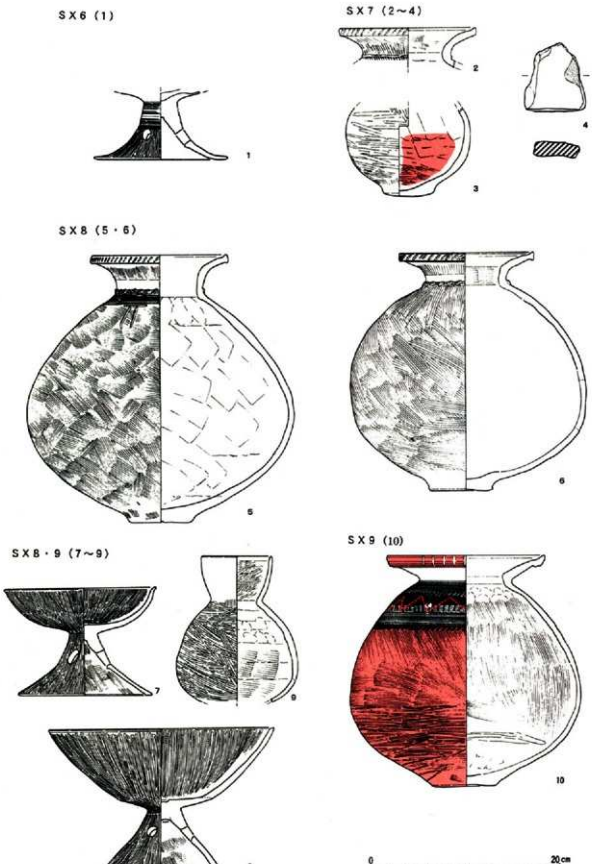
ＳＸ８・９（７～９）　７～９は、ＳＸ８東周溝とＳＸ９西周溝が接した場所からの出土であり、本来どちらの墓に伴っていた土器であるかは不明である。７は椀形高杯である。口縁端部をわずかに外反させる。８は有稜高杯である。口縁端部は面をもち、脚部は若干内彎する。７・８共に全体的にミガキで仕上げ、丁寧なつくりである。９はヒサゴ壺である。口縁部外面は摩耗しており、不明瞭であるが、ミガキ調整であると思われる。

ＳＸ９（10）　10はパレス壺である。色調は明橙色を呈し、濃尾平野一帯で用いられるパレス壺の胎土とは異なる。擬凹線と刺突文で施文した後、山形に刺突文を施す。さらに、口縁部に棒状浮文、肩部に円形浮文を貼り付けた痕跡が確認できる。口縁部内面は横ナデのみで施文は認められない。赤彩は、口縁部外面と肩部の山形文部分及び体部下半に認められる。

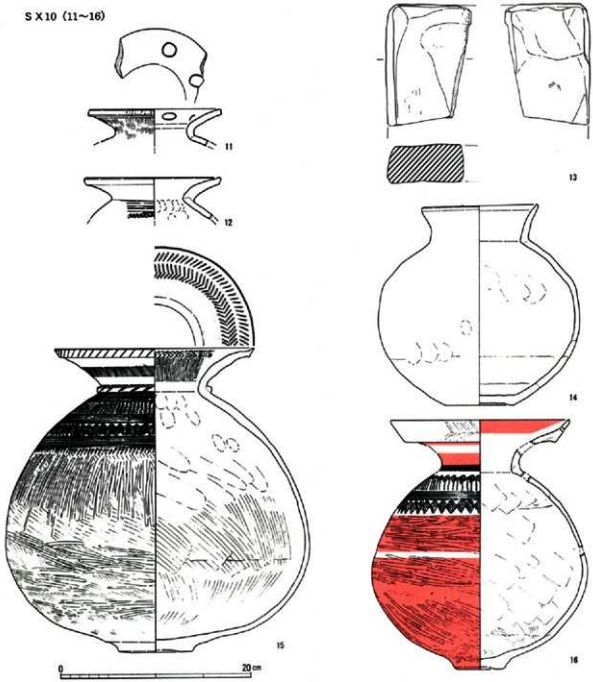
ＳＸ10（11～16）　11・12は広口壺である。いずれも頸部から外方に広がる。11の口縁部内面には円形竹管状の刺突文が２ヶ所確認される。12の肩部には不明瞭であるものの、擬凹線及び波状文が確認される。13は砥石である。少なくとも２面使用していたようである。14は直口壺である。体部外面の調整は、摩耗が著しく不明である。15は広口壺である。頸部から口縁部にかけて大きく広がり、口縁端部はつまみ上げたように上方へ拡張する。体部は下ぶくれ状になる。頸部に突帯を巡らせ、刺突を施す。口縁端部、口縁部内面にも刺突が認められる。肩部は擬凹線、刺突、波状文を用いて加飾する。赤彩は認められない。16はパレス壺である。頸部から外方へ外反して広がり、口縁端部で上方にのびる。頸部に擬凹線、肩部に波状文、刺突、擬凹線で加飾する。口縁部外面にも綾杉状に刺突を施すようであるが、摩耗が著しいため、はっきりしない。赤彩は、口縁部及び加飾の無くなる体部下半に認められる。また、口縁部に１ヶ所、焼成後穿孔が認められる。

2　その他の時期（17～22）

17は無節の縄文を施した後、部分的にナデ消している。さらに弧状の沈線を描く。縄文中期末の深鉢と思われる。ＳＤ11から出土。18は馬見塚式の変容壺であろう。19・20は馬見塚式の深鉢である。21は、内面はハケで調整し、口唇部に刺突を刻む。弥生中期の甕であろうか。22は口縁部が短く外反し、面をもつ。内面・外面共にハケ調整である。21・22はいずれもＳＤ11出土。23は甕台部である。台部と体部の境は緩やかなカーブを描く。外面は一様にナデており、厚ぼったいつくりである。弥生時代中期後葉のものであろうか。24は小型鉢の体部になると思われる。底部付近を削るほか、全体にナデ調整を行い、粗製である。ＳＸ９から出土。25は土師器高杯である。口縁端部はわずかに反り気味で面をもつ。脚端部は下方へわずかにのび、外面に１条沈線状の凹みが認められる。全体的に工具によるナデで調整している。この調整の結果、脚部は不明瞭であるが面取りがなされる。５世紀末頃のものであろうか。26は鉄製の鎌である。



第13図　出土遺物実測図（その1）（S＝1:4）



第14図　出土遺物実測図（その2）（S＝1:4）

方形周溝墓

遺構名	性 質	時 期	地 区	長軸(m)	短軸(m)	周溝深さ(m)	方 位	特記事項
SX4	方形周溝墓	弥生～古墳初頭	A～D・10～13	11.3		0.1～0.32	N39° E	
SX6	方形周溝墓	弥生～古墳初頭	A～C・7～10	7.3	6.9	0.18～0.35	N47° E	
SX7	方形周溝墓	弥生～古墳初頭	C～D・7～10			0.25	N65° E	糸の付着した遺出土
SX8	方形周溝墓	弥生～古墳初頭	A～D・4～7	11.2	10.2	0.12～0.38	N51° E	
SX9	方形周溝墓	弥生～古墳初頭	C～D・2～5			0.45～0.60	N47° E	周溝から壺石検出
SX10	方形周溝墓	弥生～古墳初頭	C～D・7～2	7.5		0.5～0.8	N52° E	

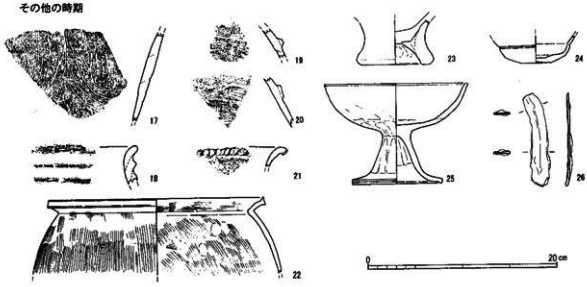
土坑

遺構名	性 質	時 期	地 区	長軸(m)	短軸(m)	周溝深さ(m)	方 位	特記事項
SK13	土壙墓？	弥生～古墳初頭？	B14	1.79	0.5	0.04～0.1	N51° E	

溝

遺構名	性 質	時 期	地 区	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方 位	特記事項
SD1			欠		番			
SD2a	溝	中世以降	AB・39～40		2	0.17～0.4	N55° E	
SD2b	溝		AB・40～41		0.7	0.12	N13° W	
SD3	溝	平安～鎌倉	A～D・22～23		1	0.49～0.52	N75° W	
SD5	溝	不 明	A～D・21～22		0.78	0.32～0.57	N75° W	
SD11	溝	弥生～古墳初頭？	A～D・ウ～ア		1.06	0.3	N56° E～N70° E	
SD12	溝	鎌 倉	A～C・7		0.59	0.06～0.14	N82° W	旧SD9

第1表　遺構一覧表



第15図　出土遺物実測図（その3）（S＝1:4）

番号	実測番号	時　期	器種	出土地区	層位・遺構	取上No	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎　土	色　調	焼成	残　存	特記事項
1	007-03	弥生～古墳初頭	椀形高杯	C9	SX6			脚径14.2		やや粗	淡黄灰色	良好	脚部2/3	
2	004-01	弥生～古墳初頭	広口壺	C8・9	SX7西溝・北溝	1	14.2			やや密	浅黄橙色	並	口縁部1/2	
3	007-01	弥生～古墳初頭	壺	D9	SX7西溝	2・3		5.2		やや密	にぶい橙色	良好	約1/3	内面に水銀朱付着
4	005-02	弥生～古墳初頭	砥石	D8	SX7西溝	S1								
5	006-01	弥生～古墳初頭	広口壺	D6	SX8南溝	2	14.2	6.9	28.3	やや密	橙色	良好	約1/2	胴部にヘラ描きあり
6	002-01	弥生～古墳初頭	広口壺	D6	SX8南溝	1・2	14.2	6.7	25.5	やや密（2mm程度の砂粒含）	橙～褐色	並	ほぼ残存	
7	007-02	弥生～古墳初頭	椀形高杯	D4	SX8東溝・9西溝	3	16	脚径14.1	11.6	密	赤色	良好	杯部2/3 脚部1/2	
8	002-02	弥生～古墳初頭	有稜高杯	C4	SX8東溝・9西溝	5	23.6	脚径12.5	15.5	やや粗（3mm以下の砂粒含）	橙色	並	杯部ほぼ残存 脚部1/4	
9	003-02	弥生～古墳初頭	ヒサゴ壺	D4	SX8東溝・9西溝	4	7.1			やや密	にぶい橙～灰白色	並	底部欠損	
10	003-01	弥生～古墳初頭	パレス壺	C3	SX9北溝		16.6	6.1	24.7	やや密	淡橙色	並	ほぼ残存	赤彩
11	004-03	弥生～古墳初頭	広口壺	D7・イ	SX10北溝		13.6			やや密（2mm程度の砂粒含）	灰白色	並	口縁部1/4	口縁部内面に竹管状の刺突
12	004-02	弥生～古墳初頭	広口壺	D1	SX10西溝	5	14.1			やや粗（3mm以下の砂粒含）	にぶい橙色	並	口縁部1/3	
13	004-06	弥生～古墳初頭	砥石	D7	SX10北溝	S1								
14	005-01	弥生～古墳初頭？	直口壺	D1	SX10西溝	9	12	7.2	21.4	やや粗（4mm以下の砂粒含）	にぶい黄橙～明黄褐色	並	口縁部ほぼ残存 その他1/2	
15	001-01	弥生～古墳初頭	広口壺	C0	SX10北溝	10	21	7.8	32.3	密（2mm以下の砂粒含）	橙色	良好	ほぼ残存	
16	008-01	弥生～古墳初頭	パレス壺	D7	SX10北溝	1・4	19	5.4		粗	淡黄灰色	並	口縁部1/6 体部下半1/6	口縁部に1ヶ所、焼成後穿孔。赤彩
17	009-07	縄文中期	深鉢		SD11					粗（5mm以下の砂粒含）	橙～褐色	並		
18	009-02	馬見塚	変容壺	D7	SX7北溝					粗	淡黄灰色	並		
19	009-05	馬見塚	深鉢	A・B7	落ち込み					粗	灰白色	並		
20	009-04	馬見塚	深鉢	C1	落ち込み					粗	淡黄灰色	並		
21	009-06	弥生中期	甕		SD11					粗（2mm以下の砂粒含）	褐色	並		
22	009-01	弥生中期	甕	B7	SD11		22.8			やや粗（2mm以下の砂粒含）	赤橙色	良好	口縁部1/8	
23	004-04	弥生中期	甕		排土			台径7.4		粗（3mm以下の砂粒含）	にぶい橙色	並	台部1/3	
24	004-05	古墳前期	小型鉢	C2・3	SX9北溝					粗（2mm以下の砂粒含）	にぶい黄橙色	並	体部1/3	
25	010-01	古墳中期	高杯	A7	砂層		15.2	脚径9.6	10.6	やや粗（2mm以下の砂粒含）	橙色	並	杯部1/3 脚部5/6	
26	005-03		鉄製鎌？	D0	落ち込み									

第２表　遺物一覧表

Ⅴ．科学分析

1　はじめに

瀬干遺跡の方形周溝墓から出土した、廻間Ⅰ式末～Ⅱ式前半（3世紀中頃）の壺の内面には、赤色物質の付着が認められる。今回の自然科学分析では、この赤色物質の成分が「水銀朱」であるか、「ベンガラ」（酸化鉄）であるか確認することにした。通常、水銀朱とベンガラなどの酸化鉄との判別は、X線回折により容易にできるが、今回の赤色物質の付着は極めて微量であった。分析に先立ち肉眼観察を行ったところ、その色調より水銀朱の可能性が想定されたため、今回は蛍光X線分析装置による元素定性分析を行い、水銀が検出されるかどうか検討した。

2　資料

資料は、廻間Ⅰ式末～Ⅱ式前半（3世紀初頭）の壺破片に付着した赤色物質1点である。赤色物質の付着がごく微量であったため、今回は土器片に付着した状態のまま分析を行った。

3　分析方法

波長分散型蛍光X線分析装置（理学電気工業製：RIX 1000）により、$_{21}$Sc～$_{92}$Uの範囲の元素定性分析を行った。この方法は、試料にX線（一次X線）を照射し、含有される元素が発する固有X線（二次X線）を測定することにより、その成分を知ろうとするものである。サンプリングが困難な文化財の材質調査に、広く用いられている手法である。以下に分析方法を記す。

(1)　装置

理学電機工業社製RIX1000（定性分析プログラム）

(2)　試料調製

赤色物質が付着した壺片を適当な大きさに調整した後、試料ホルダーに固定した。

(3)　測定条件

X 線 管；Cr（50Kv－50mA）
試料マスク；30mm ϕ
試料スピン；OFF
ダイアフラム；30mm ϕ
分光結晶；LiF
検出器；SC

4　結果

赤色物質の元素定性スペクトルチャートを第16図に示す。本装置のX線管には、ターゲットにCrを用いていることから、重元素の励起効率が低いものの、バリウム（Ba）、ジルコニウム（Zr）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、水銀（Hg）、亜鉛（Zn）、銅（Cu）、鉄（Fe）、クロム（Cr）、チタン（Ti）、のスペクトルが確認された。ただし、クロムに関しては、試料からの固有X線のほかに、ターゲットからの一次X線が重なり合ったものである。（図中の＊マーク）。

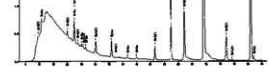
5　考察

今回の赤色物質から検出した元素の中には、水銀（Hg）のスペクトルが比較的強い強度で認められることから、この赤色物質は水銀朱と考えられる。なお、検出元素中には鉄（Fe）も認められるが、おそらく胎土中に比較的多く含まれる鉄が検出されたものであり、ベンガラなど酸化鉄の赤色物質の存在を示唆するものではないと考えられる。

引用文献

「蛍光X線分析におけるオーダー分析の原理と応用」APPLICATITON REPORT.　理学電気工業　1991

山崎一雄「古文化財の科学」352p　思文閣出版　1990



第16図　赤色物質付着壺片の元素定性スペクトル

VI. 結　　語

1　方形周溝墓について

今回の調査で検出した方形周溝墓は６基である。そのうち２基は、１次調査で検出された周溝墓の延長部分にあたり、１次調査の成果も加えると計８基となる。

時期　遺構の性格上、時期を決定するのは困難であるが、出土遺物をみる限りでは、椀形高杯および定型化したヒサゴ壺が認められること、有稜高杯の形状（口稜比及び杯部高と脚部高の比率）、広口壺の最大径が体部中央やや下半に位置することなどから、概ね３世紀中頃（廻間Ⅰ末～Ⅱ前半にかけて[1]）と捉えられ、個々の墓で大きな時期格差があるとは考えにくい。

平面・断面プラン　平面形態は、内側のラインが直線的で外側ラインが曲線的である。断面形はＵ字形であるが、内法部分が外法部分に比べ急勾配となる。

検出した周溝墓のうち、ほぼ全形のわかるものは１次調査を含め３基あるが、この３基はいずれも南周溝に陸橋部をもつという点で共通している。隣り合う周溝墓の多くは、周溝の一部を重複させるように造る。また、比較的残りの良かったＳＸ９・10では周溝の外側が浅くテラス状になる。この傾向は、削平を受け、残りの良くないＳＸ８でも見受けられ、少なくとも瀬干遺跡では周溝の外側が浅いテラス状になるようである。

相互の墓の前後関係　１次調査では、ＳＸ２→ＳＸ５、ＳＸ２→ＳＸ３（２次ＳＸ８）と報告されている。２次調査では、土層観察から、ＳＸ８→ＳＸ９→ＳＸ10となる。

墓道　墓道を想定するにあたり、まず考えねばならないことは、この地を墓域としていた人々の居住域である。居住域を想定するにあたって、瀬干遺跡とその周辺の地形を見ておきたい。

まず、今回の調査で明らかになったのは、調査区の北側と南側で落ち込みが検出されたことである。いずれも落ち込みの最深部で粗砂が検出され、流路となっていたことが窺える。当遺跡で検出された方形周溝墓は、これらの落ち込みに制約を受けて造られている。

次に、周辺地形図をもとに調査区周辺の地形の復原を試みる（第17図参照）。今回の調査で確認された落ち込みの部分は低く、墓域の検出された部分は高くなっている。また、地図の作られた時、左岸二号幹線水路となっていた１次調査の西側一帯の標高は低く、和屋集落及び瀬干遺跡から東側は高い。このことから、瀬干遺跡の西側は北・南側と同様落ち込みになっていると推定され、瀬干遺跡は南東から延びる微高地の縁辺部に所在するといえる。従って当該期の居住域は今回の調査区よりさらに東側であると考えられる。

墓道は、居住域と墓域を結ぶため、調査区南東側からのラインが想定される。なお、先述したようにほぼ全形のわかる方形周溝墓（１次ＳＸ２、２次ＳＸ６、ＳＸ８）は、いずれも南周溝に陸橋をもつものである。従って、墓道は調査区南東側から各方形周溝墓の陸橋部を結ぶラインが考えられる。

2　周溝埋土で検出された集石について

ＳＸ９の北西コーナー部分付近から拳大の礫が20個程、ほぼ円形にまとまった状態で出土した。当遺跡の遺構埋土は粘質土が多く、礫の混入は少ない。この状況から考えて、量は少ないが局部的にまとまりを持っているという点で、人為的に置かれたものと考えられる。集石は、周溝底部からかなり高い位置で検出されており、周溝がある程度埋まった段階での追葬も想定して土層観察を行ったが、集石下に土坑などは認められなかった。また、集石の周辺で炭・焼土を確認したものの、集石自体に被熱した痕跡は認められなかった。

集石の性格について、現状において不明であるものの、今後の類例の増加を待って検討したい[2]。

3　赤色顔料の付着した壺について

ＳＸ７の西周溝から、内面に赤色顔料の付着した壺が出土した。この物質は、蛍光Ｘ線分析により、ほぼ「水銀朱」（以下、朱と表記）であることが明らかになった。朱は、底部よりもやや上面に６cm×５cm程度の範囲で認められた。この壺は、墓での施朱行為を行うための朱を入れた容器と考えられよう。

近年、三重県下では３世紀代の墓の調査事例が増加しつつある。その中で、朱の使用を想起させる石杵・石臼の出土が見受けられる。津市位田遺跡[3]・一志郡三雲町前田町屋１号墳[4]・多気郡明和町コドノ遺跡[5]などであ

る。位田遺跡・コドノ遺跡の方形周溝墓は、出土遺物から廻間Ⅰ式期に並行すると捉えられ、少なくともこの時期から墓での施朱行為が行われていたと考えられる[6]。

註

(1) 赤塚次郎『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター　1990

(2) 関東で、赤い小礫が方形周溝墓から出土する事例がまとめられている。しかし、礫が加工されていないという共通点はあるものの、礫の色・大きさ・出土状況等異なり、現状においてこの事例と同等のものであるとは捉え難いが、参考として挙げておきたい。
　福田　聖『赤い小石―方形周溝墓出土の小礫について―』『埼玉考古』第30号　埼玉考古学会　1993

(3) 米山浩之『位田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999.3

(4) 新名　強『前田町屋遺跡第２次調査』三重県埋蔵文化財センター　1999.3

(5) 平成10年度本調査。平成12年３月現在、報告書作成中である。

(6) なお、ここでは３世紀の墓に伴なう朱関連資料を列挙したのみである。朱付着土器について集落遺跡出土のものも含め、川崎志乃氏がまとめている。
　川崎志乃『赤色顔料付着の土器について―津市雲出島貫遺跡出土土器を中心に―』『研究紀要』第８号　三重県埋蔵文化財センター　1999.3

第17図　瀬干遺跡周辺微地形図（Ｓ＝1:2,000　都市計画図Ｓ＝1:500に加筆）

調査前風景

表土掘削

作業風景

現地説明会風景

完掘状況（北から）

SX4（北東から）

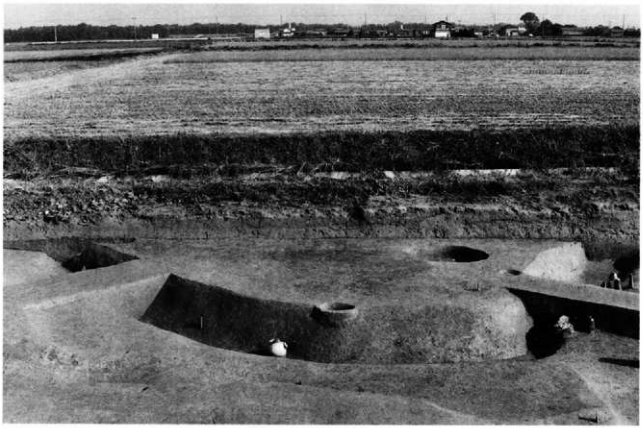
SX6（東から）

SX7（南西から）

SX7　遺物出土状況（東から）

SX8（南東から）

SX8　遺物出土状況（北から）



SX9（西から）

SX9　北西コーナー部分集石検出状況（南西から）

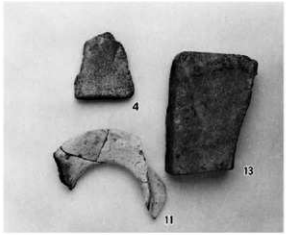
SX9　北周溝遺物出土状況（北西から）

SX10（南西から）

SX10　北周溝遺物出土状況（南から）

1

3



5

5 ヘラ描き部分

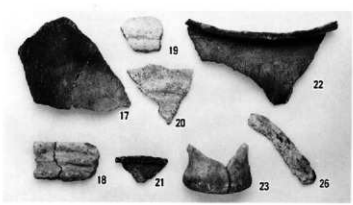
6

7

9

8

出土遺物 (1)



出土遺物 (2)

報告書抄録

ふりがな	せぼしいせき（だいにじ）はっくつちょうさほうこく
書名	瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０３
編者者名	原田 忠理子・中川 明
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　☎ 0596(52)1732
発行年月日	西暦2000年　3月　31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
瀬干遺跡	三重県松阪市櫛田町字瀬干・一ノ坪	204		３４° ３３′ １９″	１３６° ３３′ １９″	19980817～ 19981207	1,900	一般地方道松阪環状線地方特定道路整備事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬干遺跡		弥生～古墳 中世	溝　1条 方形周溝墓　6基 溝　5条	縄文土器 弥生土器 古式土師器 土師器 陶器	

平成12(2000)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　203

瀬干遺跡(第２次)発掘調査報告

２０００・３

編集
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　富士印刷株式会社